

# IV

---

明治維新と子ども

## IV 明治維新と子ども

### 1 海外に目を向けた人材の育成

薩摩藩は、琉球などを通じて海外情勢を把握しており、西洋の文化や技術が優れていることをきちんと認識していた。それゆえ、時代が求める人材の姿をいち早く捉え、既成の枠にとらわれない教育を実践した。薩英戦争で西洋列強の技術力・軍事力を身を以て認識した後は、鎖国体制下にもかかわらず、開成所を設置して英語や西洋技術等の教授を行った。さらに、成績優秀な者を選抜して、英国留学生として派遣した。薩摩藩の教育の大きな特徴は、海外に目を向けた人材育成を行ったことである。

- 薩摩藩では、第8代藩主 島津重豪<sup>しげひで</sup>の時代から蘭通詞<sup>らんつうじ</sup>（オランダ語の通訳）を登用しており、重豪の薫陶を受けた曾孫 斉彬は、蘭通詞の育成にとどまらず蘭学の教育へと発展させた。これが開成所の教育につながった。
- 唐通事<sup>とうつうじ</sup>（中国語の通訳）・蘭通詞いずれも、城下士、郷土、庶民を問わず希望者を募り、能力本位で人材を育成した。慶応元年（1865年）、奄美での白糖工場建設の際には、イギリス人技術者の通訳とするため、現地の若者に英通詞<sup>えいつうじ</sup>（英語の通訳）稽古を命じた。<sup>1</sup>
- 第11代藩主 島津斉彬は、安政2年（1855年）に蘭学講会所設立の布達を出しており、石河確太郎にオランダの学制の調査を命じている。斉彬の急逝により計画は中断されたが、薩英戦争を経て「開成所」として実現した。
- 開成所の生徒は、三等から一等まで3段階の構成で、稽古扶持（手当）が付いた。まず、洋学を講習する必要がある、入学生は蘭・英語の初歩から教わり、次いで海陸軍の砲術・操練・兵法、築城、測量、航海、機械、造船、天文、地理、数学、物理、分析（化学）、医学など専門科目を学んだ。<sup>2</sup>



「開成所蔵書目録」【尚古集成館蔵】

- 開成所の教官は、教授10人、助教10人、訓導師8人、句読師6人となっており、長崎で英学を学んだ英学者を中心に、全国から一流の学者を招へいした。このような人材登用は、明治政府が優秀な学者や技術者を海外から招いた、「お雇い外国人」の制度に通じるものであった。<sup>3</sup>

1 『薩摩藩対外交渉史の研究』徳永和喜（西郷南洲顕彰館長）

2 『薩藩海軍史 中巻』公爵島津家編輯所編

3 安藤保（九州大学名誉教授）

## &lt;開成所の主な教官&gt;

氏名	出身	備考
石河確太郎	大和	集成館事業（特に鹿児島紡績所）に深く関わる。
松木弘安（後の寺島宗則） <small>こうあん</small>	薩摩	薩摩藩英国留学生を引率。維新後は外務卿等を歴任。
上野景範 <small>かげのり</small>	薩摩	長崎で何礼之 <small>がれいし</small> に学び、薩摩英学の先駆者となる。
八木称平	薩摩	緒方洪庵の適塾に学び、種痘法の翻訳書を著す。
中浜万次郎（ジョン万次郎）	土佐	漂流中に捕鯨船に救助され、アメリカで造船等を学ぶ。
巻退蔵（後の前島密） <small>まき</small>	越後	江戸、函館、長崎で英語を学び、後に郵便制度を導入。
嵯峨根良吉 <small>さがね</small>	丹後	適塾や長崎で英語を学び、江川塾等で砲術を学ぶ。
本間郡兵衛	出羽	長崎海軍伝習所の通訳を経て、欧米外遊を経験。
芳川顕正 <small>よしかわ</small>	阿波	維新後は東京府知事、文部大臣、内務大臣を歴任。
安保清康 <small>あぼ</small>	安芸	長崎で英学、軍学を学び、薩摩藩の海軍養成に尽力。

● 薩摩藩英国留学生（使節団）は、19人もの大人数で、かつ13～14歳の若年者も含まれていた。薩摩藩が海外との関係性を非常に重視し、海外での実体験による人材育成や、西洋の技術も取り入れた新たな国づくりを志向していたことが窺える。<sup>1</sup>

● 薩摩藩英国留学生（使節団）の五代友厚は、大阪商法会議所（現在の大阪商工会議所）の初代会頭となり大阪の経済発展に尽力し、村橋久成はサッポロビールの基礎を築いた。また、長沢鼎かなえはアメリカに渡って実業家となり、後に「ワイン王」と呼ばれた。このように、薩摩藩は経済界をリードする人材も輩出した。



五代友厚(1835-1885)【黎明館蔵】

● 薩摩藩英国留学生を引率した町田久成は、イギリス滞在中に大英博物館などの視察を通して社会教育の必要性を認識した。維新後は、文部大丞、内務省博物局長として博物館（現在の東京国立博物館）創設に尽力し、初代館長となった。また、森有礼ありのりは、ロンドン大学で学ぶ中で教育に目覚め、多くの留学生が帰国する中、勉学を続けるためアメリカに渡った。帰国後は外交官となり、駐英公使などを歴任し、後に文部大臣として学校令を制定するなど、学校教育制度の確立に貢献した。このように、留学生関係者からは、文化や教育の面で活躍する人材も出た。

1 犬塚孝明（鹿児島純心女子大学名誉教授）



(後列左から)  
 田中盛明, 町田実積, 鮫島尚信, 寺島宗則, 吉田清成  
 (前列左から)  
 町田清蔵, 町田久成, 長沢鼎



(後列左から)  
 島山義成, 高見弥一, 村橋久成, 東郷愛之進, 名越時成  
 (前列左から)  
 森有礼, 松村淳蔵, 中村博愛  
 薩摩藩英国留学生【鹿児島県立図書館蔵】

● 薩摩藩は、慶応元年（1865年）の英国留学生に続き、翌年には米国留学生6人を派遣した。彼らは、長崎にいたアメリカ人宣教師フルベッキを通じ、キリスト教団体の協力を得て、アメリカへ渡った。その後、イギリスで学んでいた森有礼や長沢鼎なども合流して、キリスト教団体で共同生活をしながらアメリカで学んだ。戊辰戦争が始まると、留学生の多くは帰国し、明治政府で活躍した。彼らの中で、後に吉原重俊は初代日本銀行総裁となり、仁礼景範は海軍大学校長等を経て海軍大臣となった。

なお、米国留学生の多くは元攘夷派の青年であり、藩は彼らに西洋の進んだ技術を学ばせることで攘夷の非を悟らせ、海軍の発展を図ろうと考えたものであった。<sup>1</sup>

1 「第二次薩摩藩米国留学生覚え書-日米文化交流の一齣-」(『日本歴史 453号』)犬塚孝明(鹿児島純心女子大学名誉教授)

<薩摩藩米国留学生（慶応2年，1866年3月出発）>

氏名	帰国年	帰国後	備考
仁礼景範	明治元年	海軍大学校長，海軍大臣	薩英戦争でスイカ売り決死隊
こうか そすけ 江夏蘇助	明治元年	明治3年死去	寺田屋事件の鎮撫使
湯地定基	明治4年	開拓使に勤務し根室県令	妹の静子は乃木希典夫人 <small>のぎまれのすけ</small>
吉原重俊	明治6年	初代日本銀行総裁	寺田屋事件で捕縛
種子島敬助	明治6年	不明	
きとう 木藤市助	—	（慶応2年アメリカで死去）	寺田屋事件で捕縛

◎ 前田正名まさなは、慶応元年（1865年）、16歳で長崎に留学した。長崎では、当時洋学の第一人者といわれた何礼之れいし（祖先は中国出身で、通訳の家柄）の英語塾で学んだ。薩摩藩英国留学生の選に洩れたこともあり、発奮して勉学に励んだという。

そして、正名は西洋留学の資金づくりのために、兄の猷吉、高橋新吉の3人で上海に渡り、『和訳英辞書』（通称『薩摩辞書』）を編纂・刊行した。同書は、幕府の開成所が作った『英和対訳袖珍辞書しゅうちん』を基に、見出し語に片仮名を付けるなどの改良を加えたもので、2400部刊行されたという。

『薩摩辞書』は、その後も明治20年（1887年）頃までに6回も増刊され、我が国の英学界に果たした功績は大きい。<sup>1</sup>



前田正名（1850—1921）  
【国立歴史民俗博物館蔵】

『和訳英辞書』（『薩摩辞書』）：資料20（P.153）

コラム

前田正名の奄美振興策

明治11年（1878年）に奄美の黒糖の自由売買が許可されたが、その後本土の商人が続々と進出し、多くの島民がこれらの商人から負債を抱えるようになった。こうした状況に対し、農商務省の大書記官であった前田正名は、奄美諸島の黒糖振興には流通の近代化が最も重要と考え、明治14年に砂糖産地問屋方式の導入を提唱した。これは、資金の100万円の半分を政府が出資して残りは島民から集め、本部を名瀬なせに置いて沖永良部おきのえらぶと鹿児島に支店を置くというものであったが、最終的には明治政府の政策とはならず、実現はしなかった。

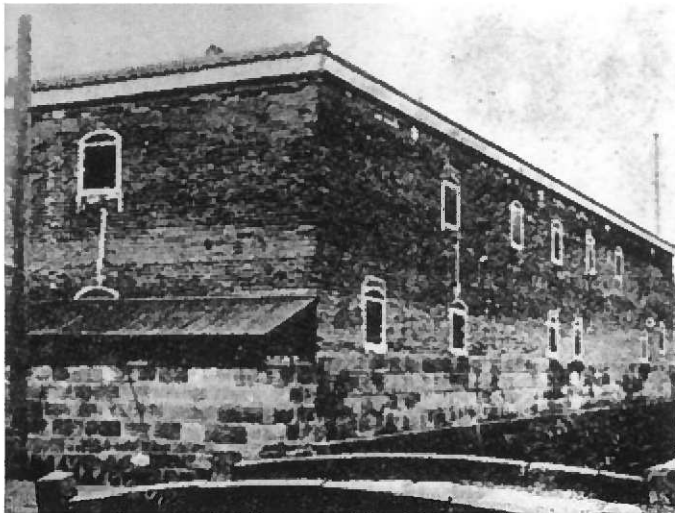
1 『前田正名』祖田修（京大名誉教授）

● 薩摩藩は、イギリス人医師 ウィリアム・ウィリスを招き、明治3年(1870年)に鹿児島医学校兼病院(現在の鹿児島大学医学部)を設立した。ウィリスは医療に携わりつつ、薩摩の若者に医学のほか、英語や数学、地理も教えた。また、藩への建言の中で、学生の入学については15歳以上とし、基礎学力の重要さなどを指摘している。

鹿児島医学校は、明治初期に西洋医学の教育を行った数少ない例で、ここで学んだ高木兼寛<sup>かねひろ</sup>は、後に海軍軍医総監となり、脚気<sup>かっけ</sup>の撲滅等に功績を挙げた。



ウィリアム・ウィリス(1837-1894)【黎明館蔵】



鹿児島医学校兼病院『鹿児島県史 第3巻』  
鹿児島城下滑川<sup>なめかわ</sup>(現在の鹿児島市小川町)に建設され、レンガ造りだったため「赤倉」と呼ばれた。

(1871年9月22日付)

(前略)ところで、先に申し上げましたように、医学生の最低年齢を15歳とすることをご承認くださるよう改めてお願い申し上げます。それにより現在医学校に在籍している15歳未満の学生は、普通の学校に戻し、15歳になって医学校に入学するまで、医学を修得するのに必要な基礎力の充実に専念させることを、ここに謹んで提言いたします。

「薩摩政府宛ウィリアム・ウィリス建言」<sup>1</sup>【黎明館蔵】

(1872年9月2日付)

(前略)私は、若い学生には英語、地理、数学を学ばせています。時間が許す限り、彼らの勉強を助けています。そして、よくできる学生に十分な学生の手配を見させています。また、学生は職員の一部から日本語文献の読解を習っています。

「文部省宛ウィリアム・ウィリス報告」<sup>2</sup>【黎明館蔵】

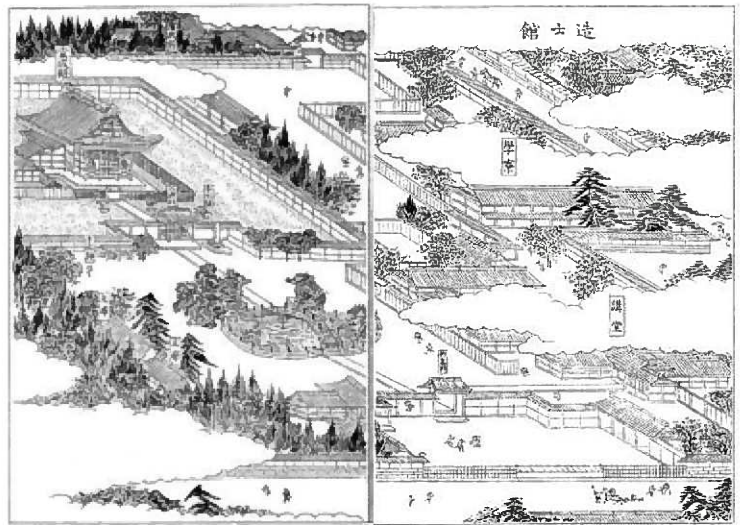
「薩摩政府宛ウィリアム・ウィリス建言」：資料21 (P.154)

## 2 藩校での教育

薩摩藩の藩校 造士館は、安永2年(1773年)に第8代藩主 島津重豪<sup>しげひで</sup>が開設したもので、城下士のみならず、郷士にも門戸が開かれていた。講義は儒学、中でも朱子学を中心に行われ、岡山<sup>しづたに</sup>の閑谷学校、萩(現在の山口県萩市)の明倫館、熊本の時習館などと並ぶ全国有数の藩校であった。成績優秀な者については、幕府の学問所である昌平黉<sup>しょうへいこう</sup>などで学ぶ道も開けていた。

- 第2代藩主 島津光久は学問熱心で、幕府の朱子学者である林羅山<sup>らざん</sup>とも親交があった。藩校設立の計画を進めていたが、実現の前に亡くなり、計画は頓挫してしまった。

- 島津重豪によって設立された造士館は、演武館と一体で、文武両道を目指した学校であった。



造士館図『三国名勝図会』

また、重豪は造士館のほかにも、明時館(天文館)、医学院、薬園などの教育・研究機関を設立した。

- 造士館には寄宿舎があり、通学できない郷士の寮生は、ここで自炊をしながら学問に励んだ。



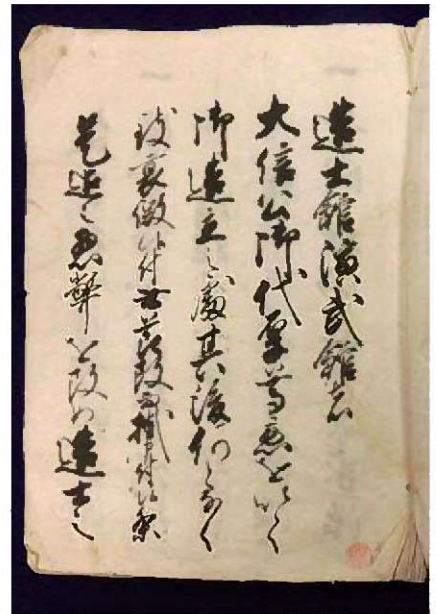
「学寮日牒」【出水市歴史民俗資料館蔵】

出水郷士の河添白水が造士館で学んだ時の学寮日記で、寄宿舎での生活が記されている。

1 天保14年(1843年)、五代秀堯らにより編纂された薩摩・大隅・日向の三か国の地誌。

- 第11代藩主 島津斉彬は、嘉永7年(1854年)に「学問の大本」と題する訓示を出し、学問の本義を「義理を明らかにし、心術を正し、己を修め人を修むる器量を養ひ、君父に対して忠孝を尽くし、全体を汚さざる儀、第一の要務」と示した。

また、安政4年(1857年)には「造士館論告」を出し、それまでの朱子学中心の学問から、洋学や国学なども造士館の講義に取り入れることになった。



「造士館論告」  
【村田新八遺品保存会蔵, 黎明館保管】

- 一 学問の標的は修身齐家治国平天下之道理を研究、本末前後を知別いたし、然て当時之政務奉行候ても能其任堪候様に心懸專要之事に候、(中略)

余力には、西洋和解之諸書も熟覽し、外夷の風俗器械をも致弁別、我羽翼となして、益皇化万国に行亘り候様心懸肝要に存候、

「造士館論告」<sup>1</sup>

【大意】

- 一 学問の目的は身を修め、家を<sup>ととの</sup>齊え、国を治め、天下を平らかにする道理を究めることであり、本質を判別して現在の政治を行う任に堪えられるように心がけることが肝要である。(中略)

余力があれば、翻訳した西洋の書物も熟読し、外国の文化や技術をも身に付けて、ますます国力を世界に発展させるように心掛けることが重要だと考える。

以前の薩摩藩は、教育への支出が少なく、規律もきちんとしておらず、学生が互いに励まし切磋琢磨することが中心だった。斉彬の代に至り、藩主がしばしば学問の様子を視察に訪れ、規律を引き締めたため、教育は盛んになったという。

「観光集」秋月悌次郎<sup>2</sup>【鹿児島県立図書館蔵】

1 『鹿児島県教育史』鹿児島県教育委員会編

2 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士



- 藩校 造士館の設立に刺激され、外城(郷)の中にも学校設立の動きが出た。垂水(現在の垂水市)の文行館、種子島の大園学校、都城(現在の宮崎県都城市)の稽古館など8校が幕末までに設立された。中でも、種子島の大園学校の設置目的は、徳を以て教化することであった。

### 卷七十二

(安政三年)十月四日、有司贈書麿邸、相議曰、造史館及演武館于内城、使諸生読書肆武、官長時々臨観以奨励之、則可以裨風教、如何、答書曰、可矣、  
「種子島家譜」<sup>1</sup>

### 【大意】

#### 卷72

(安政3年、1856年)10月4日。(種子島の)役人が相談し、書状を鹿児島邸に送った。その内容は、「造史館と演武館を(西之表の)内城に設置し、若者に本を読み、武術を稽古させよう。学校の長が時折視察して学問を奨励すれば、徳を以て教化することに役立つので、いかがだろうか。」とのことであった。(鹿児島邸からの)返答は「良い」とのことであった。

- 薩摩藩の青少年は、自顕流など武術の練習ばかりしていたようなイメージがあるが、向学心のある者は、城下士のみならず郷士でも藩校 造士館で学ぶことができ、さらに優秀な者は、藩外の学校(幕府の昌平黌や各地の私塾等)に留学する道も開かれていた。優秀な若者を藩の中に留めておくのではなく、積極的に藩外に送り出して勉強させ、藩外からいろいろな情報や学問を取り入れたことから、有能な人材が育った。

こうした教育システムのおかげで、薩摩藩は精強な武人を生むと同時に、漢学、国学、蘭学それぞれの分野で人材を輩出することができた。<sup>2</sup>

- すべての薩摩藩士が高いレベルの学問を修めていたわけではないが、志のある優秀な者には、藩校 造士館での教育、さらには江戸・大坂・長崎などで極めて高いレベルの学問を学ぶシステムが存在した。<sup>3</sup>

1 鎌倉時代から明治時代までの、種子島家の系譜や関係史料をまとめた歴史書。『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ八』に収載。

2 山本博文(東京大学教授)、落合弘樹(明治大学教授)

3 安藤保(九州大学名誉教授)

### 3 郷中教育

郷中教育は、薩摩藩独特の青少年教育で、郷中(地区)ごとに武士の子どもが集まり、二才と呼ばれる年長者を中心に、心身や武芸の鍛錬をする自治的な集団教育である。特定の教場は無く、郷中の家を交替しながら行った。郷中教育は、薩摩藩の武士団の士風養成の基礎となった。

- 薩摩藩の功績の一つは、藩の利害を超えた日本という国の国益について、国民国家の形成過程で国益が藩の利益より優先するという思想を作り上げたことである。要するに、維新の原動力というのは、藩という枠を越えた人々、西郷隆盛や大久保利通などの活躍によるものであり、彼らを生み出したのが薩摩であった。<sup>1</sup>
- 郷中教育では、年少者が年長者に従い、年長者は年少者の模範となるよう自らを律し、負けず嫌いの精神と連帯意識を持って心身と教養を磨いた。文武の激しい修練<sup>\*</sup>を行うとともに、薩摩琵琶にも親しみ、会話にも諧謔(ユーモア)を交え、豪壮かつ人間味のある人物となることを心がけた。そのようにして、義に身を挺し、些細なことに拘らず行動にかかるという「薩摩士風」は形成されていった。<sup>2</sup>
  - ※ 薩摩藩の剣術には、示現流(東郷示現流)と自顕流(葉丸自顕流)があり、両者とも練習は木刀を用い、示現流は立木を、自顕流は横木を激しく打つ練習を行うことで心身の鍛錬を図った。前者は主に上級武士に、後者は主に下級武士の間で広まり、幕末期の郷中教育では自顕流が多く取り入れられた。
- 郷中教育は、文武の学習のみならず、詮議と呼ばれる問答などを通して、武士道を高め、品行を正し、利欲を去り、公のために身を捧げる人材の育成に効果があった。
- 造士館への出校は午前10時から午後2時までの比較的短い時間であったが、登校前は先輩宅での朝稽古、下校後は郷中座元での復習の時間があった。第8代藩主 島津重豪が造士館を設置した時に、造士館の教育と郷中教育という二重の教育が始まり、第11代藩主 島津斉彬の時代に制度化された。<sup>3</sup>

1 猪飼隆明(大阪大学名誉教授)

2 『西郷隆盛と土族』落合弘樹(明治大学教授)

3 『鹿児島県教育史』鹿児島県教育委員会編

- 島津斉彬は、嘉永5年(1852年)、各郷中に対し、平日の行動の申告と、郷中掟の提出を命じた。その際、<sup>しもあした</sup>下荒田郷中で作成された掟には、「此節厚き思し召しを以て、士の風俗立ち直り候様、仰せ渡さる趣有り、組頭衆より郷中取締人までも仰せつけられ候」とある。斉彬の意向を反映した郷中掟が作成され、郷中取締人が監督することになったわけで、これにより郷中教育は藩の管理下に置かれるようになった。<sup>1</sup>
- <sup>しんや しきほうぎり</sup>新屋敷方限では、嘉永5年(1852年)に掟を定めるとともに、定まった教場・稽古場を設置し、指導体制を整備するに至った。従来は教場を持たず、指導者やカリキュラムが無かった郷中教育から、学校教育に近づいた新しい郷中教育が始まったと言える。<sup>2</sup>

武士の子は15歳前後で二才組<sup>にせぐみ</sup>に入り、21～22歳位に卒業する。地域で郷中をつくり、他所の郷中に入ることはない。日夜集まり文武を学び、相互扶助を行う。軟弱で柔和な様子は全く無く、質朴剛健を旨とする。

二才組が集まった際に、しばしば非常時に対処する方法や武士としての日常の行いについて問答している。これを詮議と呼ぶ。

12月14日の赤穂義士討入の日には、二才組は必ず集まり、夜通し『赤城義臣伝』の輪読会を行う。これを通して、少年の忠義の心構えを鼓舞している。

「観光集」秋月梯次郎<sup>3</sup>【鹿児島県立図書館蔵】



『赤城義臣伝』【黎明館蔵】  
赤穂義士を題材とした読物

「観光集」：資料22 (P.155)

- 「命懸け」とか「男尊女卑」などという思想は武士道的な倫理観から出てきたものだが、正義や名誉を重んじる精神などは日本人が元々持っていた特性である。フランシスコ・ザビエルは、鹿児島の人々を「善良で悪意がなく、驚くほど名誉心の強い人々で、今までに発見された異教徒の中で最高である」と書簡に記している。鹿児島の人々の精神にはそのような下地があり、それが更に武士道や郷中教育などによって研ぎ澄まされていった。<sup>4</sup>

1・2 「幕末維新期、薩摩藩の郷中教育」(『日本歴史 613号』)安藤保(九州大学名誉教授)

3 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士

4 山本博文(東京大学教授)

## 4 庶民の教育

江戸時代の庶民の多くは、地域の先輩である二才<sup>にせ</sup>や親から教えられ、一人前の職業人になれるように、自分の生業<sup>なりわい</sup>に関する知識を得ていった。明治期になると、徐々に小学校も設置され、西南戦争後は女子に対する教育も進んだ。そして、社会の役に立つ人材になろうという意欲を持った若者が育っていった。

### 【幕末期】

- 明治時代に中世から明治初期の鹿児島県の教育についてまとめた『薩藩学事』には、藩政時代の教育についての記述もある。庶民に対する教育については「自由に任せていた」との表記であり、藩として庶民に教育を行う制度はなかった。

#### 平民ノ弟子教育方法

家塾・寺小屋ニテ修学セシメシメ、之ニシテ藩立学校へ、入学セシムルノ制ナシ、尤農民等学事ニ従事スルハ、自然意ニ任セテ、全ク禁止セシ事ナシ、

#### 家塾・寺子屋設置ノ制度

家塾・寺子屋ヲ開設スルハ、士民ノ自由ニ任ズ、

〔旧鹿児島藩學制沿革取調要目〕【鹿児島県立図書館蔵】

#### 【大意】

#### 平民の弟子教育方法

私塾や寺子屋で学習させて、彼らを藩校に入学させる制度はなかった。もっとも農民達が学習をすることは、彼らの考えに任せて、完全に禁止したことはない。

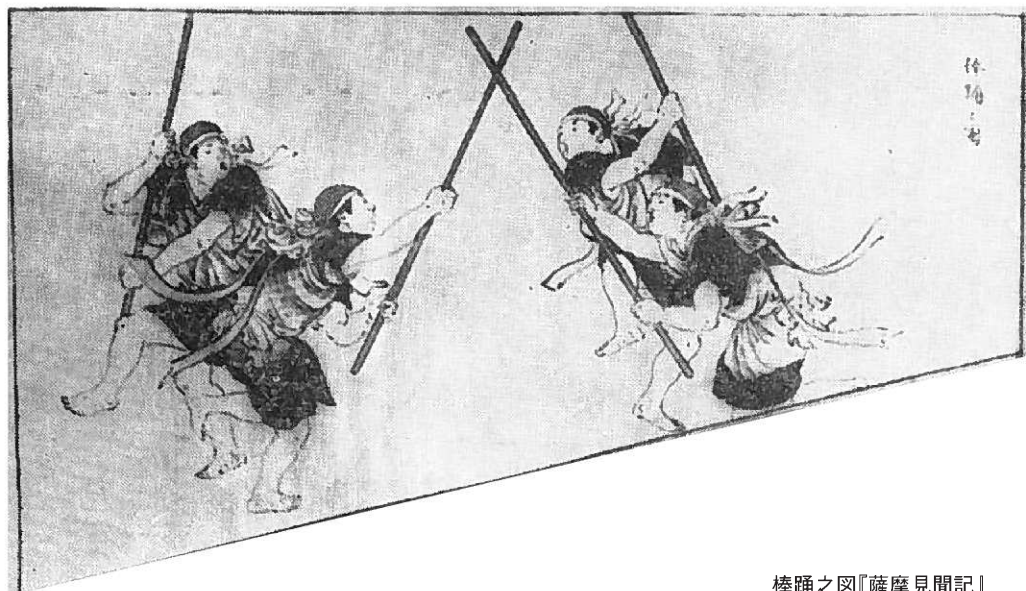
#### 私塾・寺子屋設置の制度

私塾・寺子屋を開設することは、武士にも庶民にも自由に任せていた。

- 門<sup>かど</sup>の責任者である名頭<sup>みょうとう</sup>と呼ばれた百姓は、年貢等の記録や金銭の貸借の帳簿を記入するため、文字の読み書きができた。藩体制の下部組織としての門を掌握するためには、文字の読み書きの能力が必要とされた。<sup>1</sup>

1 「百姓の貸借―幕末、串木野の場合―」(『西南地域史研究 第七輯』)所崎平(鹿児島民俗学会代表幹事)

- 子どもには物心がつくと、ごく簡単な農作業や家事の手伝いをさせた。その方法は教えるというより、見習わせて覚えさせ、やらせて、間違いを直すというものであった。厳しい見習いの反面、子どもは、その合間に山や川の伝説や草木の名のいわれなど、村の自然や歴史を学んだ。<sup>1</sup>
- 百姓は、よき村人として一生を終わることが理想的な生き方とされた。農村では、子どもをよき村人に育てるための躰<sup>しつけ</sup>が厳しかった。<sup>2</sup>
- 高城武兵衛が書き写した「教諭書」には、「子は親に孝行を尽くし、親は子どもを農業一遍に打ちかかるように育てよ」などと記されており、百姓の教育・農業政策の一端を示している。  
『知覧町郷土誌』
- 百姓の子弟への教育は、農作業等の技術教育から情操教育に至るまで、すべて実践活動を通じて行われた。幼少の頃は家庭を中心とする躰が主で、15歳になり用夫<sup>いぶ</sup>として一人前と認められると、村の異年齢集団である二才組<sup>にせぐみ</sup>に参加し、先輩から独特の厳しい躰や訓練を受けた。<sup>3</sup>
- 百姓の社会にも二才組という組織があった。方限<sup>ほうぎり</sup>の警戒、風紀の取締りなどに当たり、若者の風紀の乱れを矯正しようとするものであった。団体には一つずつ踊りがあり、踊りを練習するという団体行動の訓練に意義があり、また、娯楽と潤いを与えるという目的も持っていた。  
『樋脇町史上巻』



棒踊之図『薩摩見聞記』

- 奄美の与人<sup>よひと</sup>など有力者の子どもは、代官所で文字を習ったり、鹿児島から流罪になって来島した武士などが開く私塾で読み書きを習ったりしていた。<sup>4</sup>

1~3 『鹿児島県教育史』鹿児島県教育委員会編

4 弓削政己(奄美市文化財保護審議会長)

## 【明治初期】

- 幕末期から明治初期までの寺子屋の数は、東京487、大阪778、熊本910に対して鹿児島は19となっている。寺子屋が少ない理由として、以下のことなどが挙げられる。
  - ① 郷土が多い薩摩藩では、庶民は郷土に直接支配され、寺子屋教育を成り立たせる余裕がなかった。
  - ② 商業が未発達で町人が少ないため、読み書き・そろばん等の教育は、少人数の徒弟奉公で間に合った。<sup>1</sup>

- 政府の強力な指導で、小学校は短期間のうちに全国に開設され、明治7年(1874年)には全国で17,000校余りを数えた。同年における鹿児島県内の小学校数は97校、児童数は9,605人である。この数は多いようであるが、就学すべき学齢児童が135,139人であることから、就学率はわずか7.1%にすぎず、全国最下位であった。

さらに、女子だけの数を見ると、学齢児童63,065人中、女子はわずか300人だけしか小学校に通っていない。つまり、就学率は0.48%で、学制が施行されたにもかかわらず、女子はほとんど小学校に入学できていなかった。<sup>2</sup>



「田上小学門札」(西郷隆盛直筆)  
【鹿児島市立田上小学校蔵】

- 明治初期に水引郷(現在の薩摩川内市水引町)に設置された小学校である振励館の規則「水引郷校学規鈔」には、「凡六七篇モ附教、覚エザル人江ハ一句一字ヲ以テ授クベシ、能ク覚ユル人ハ十枚以上モ授クベキ也」とある。この時代においても、個や能力に応じた教育を実践しようとしていたことが分かる。『川内市史 上巻』

- 明治維新前の伊作郷(現在の日置市吹上町伊作)における教育施設としては、寺子屋や郷中教育を行う稽古所などがあった。明治2年(1869年)には、地域有志によって「素読館」が設置された。ここでは、常備隊(版籍奉還後、郷に代わって地方行政を担った組織)の管理下で和漢の学問を主体とした教育が行われた。<sup>3</sup>

- 明治5年(1872年)に伊作郷の素読館から改組された小学校では、次のような規則が定められていた。

1 『近世の学校と教育』海原徹(京都大学名誉教授)  
2 『薩摩おごじょ』吉井和子(鹿児島女子短期大学名誉教授)  
3 『宇都為栄村長 生誕150周年記念誌』伊作村初代村長の宇都為栄の業績をまとめた記念誌

一 禁疾走	かけあるくべからず	【大意】	(校舎内で)走らない
一 禁雑語	むだはなしすべからず		無駄話をしない
一 禁玩器	もてあそびもの相ならず		玩具を持ち込まない
一 勿争罵	あらそひのゝしるべからず		争ったり罵ったりしない
一 勿違教令	おしへをたがふ事なかれ		教えに反したことをしない
一 勿取与	もの取かゆる事なかれ		物を取り替えない
一 勤者有賞	つとむるものしやう有		努力する者は賞する
一 惰者有罰	おこたるものばつ有		おこたる者は罰する

明治五年(1872年)申四月八日

〔諸役、文武館掛及郷校教官仰付書〕【伊作郷御仮屋文書<sup>1)</sup>・日置市吹上歴史民俗資料館蔵】

- 明治に入り、鹿児島県でも教育を推進するに当たって、学校教育に当たる教員の養成が急務とされた。明治9年(1876年)に鹿児島県にも師範学校が設立され、その教員として、東京師範学校を卒業した山形県出身の北條卷蔵も招へいされた。開校式の祝辞で大山綱良県令は、優秀な教員の育成が鹿児島県だけでなく日本にとって重要であることを強調した。



北條卷蔵(1854-1893)  
【新庄ふるさと歴史センター蔵】

凡学行ノ良否ハ訓導ノ精粗ニ由ル、固ヨリ言ヲ待タス、爰ニ文部省ノ制規ニ準シ、新タニ師範学校ヲ建築シ、以テ訓導ノ必ス精ナルヲ要ス、教学ノ基本ヲ立ル所以ナリ、今既ニ落成シ今日開校ノ典ニ臨ム、此ヨリ闔校一層勉勵新築ノ旨意ヲ虚フセス教ヲ施シ業ヲ受ル、皆其精ヲ極メ他日各校ニ分在シ、生徒ヲシテ学行彬々其良善ヲ尽シ、人材ヲシテ輩出セシム、乃チ特ニ一県ノ至幸ノミナラス亦我皇国ノ美事ナリ、因テ祝辞ヲ述ヘテ落成ヲ慶シ、以テ将来ノ盛効ヲ期スト云ク、

【北條卷蔵備忘録】【新庄ふるさと歴史センター蔵】

### 【大意】

学校の良否は、教師の質の善し悪しにかかることは言を待たない。そこで、文部省の規則に基づき新たに師範学校を設置し、これに伴い、教師が優秀であることが必要になる。それは教育の基本となるからである。既に

1 江戸時代から明治初期の伊作郷地頭仮屋及び伊作村役場における日誌などの公文書。鹿児島県指定文化財。

建物は完成し、今日開校の式典に臨んでいる。全校を挙げて勉学に励み、新築した意味を充分考え教育を行い、授業を受ける。全員が精力を尽くし、後日各学校に分かれて赴任し、生徒に対し学業が盛んになるよう最善を尽くし、人材を輩出する。思うに、これは特に一県だけの至幸ではなく、我が日本にとっても素晴らしいことである。そこで、祝辞を以て完成を祝い、将来の成功を願うものである。

「北條卷蔵備忘録」：資料23 (P.156)

- 明治4年(1871年)、藩校造士館の流れを受け継ぐ教育機関として、本学校(教育行政機関であるとともに、中学校に相当するとみられる学校)が設立された。その後、明治5年の学制による学校制度にのっとり、明治8年に変則中学(学制で定められた、正規の中学校に準じる学校)が設立され、これは翌年には英語学校と準中学校になったとされる。また、小学校教員養成のための鹿児島師範学校、鹿児島女子師範学校も明治9年に設立された。しかし、西南戦争が始まると、明治10年6月に全校が閉鎖された。戦後、同年11月に師範学校、明治11年7月には準中学校が基になった県立鹿児島中学、同年10月には女子師範学校が再建された。<sup>1</sup>
- 西南戦争後の鹿児島県は、明治政府と同様、「教育は国づくりの基本」という認識の下、厳しい財政状況の中でも教育の充実を図っていった。特に岩村通俊県令は教育に熱心で、その在任中に小学校の整備も急速に進み、入学する子どもも増加した。

県下の小学校の景状は、他府県に後れ最も教育もあがらざりしが、近年にては県官の奨励と訓導の尽力にて追々卒業生も増加に至れり

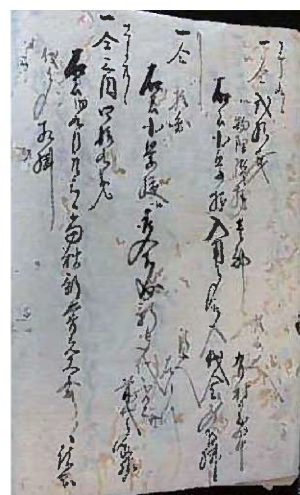
「明治12年7月4日付朝日新聞」

- 廃藩置県に続き秩禄処分<sup>ちつろく</sup>が行われたことから、士族は金禄公債証書や私有地以外からの収入を断たれた。この時、蒲生郷(現在の始良市蒲生町)の士族は「士族共有社」を組織し、旧郷の共有地(多くは山林)を士族共有社の土地とした。士族共有社は、所有地を貸したり、材木を販売するなどして得た資金で、学校の教師を雇う費用や学校で必要とする物品を購入する資金等に充てた。

このように、次世代を担う子どもを育てるため、地域が学校教育を支えた。

「諸払帳 共有物取扱所」

【蒲生郷御飯屋文書<sup>2</sup>・始良市教育委員会蔵】



1 『中学造士館の研究—資料の紹介と考察』山下玄洋(元鹿児島史談会副会長)

2 江戸時代から明治初期の蒲生郷地頭飯屋及び蒲生村役場における日誌などの公文書。鹿児島県指定文化財。



- 明治10年(1877年)に青少年の投稿雑誌として創刊された『<sup>えいさいしんし</sup>穎才新誌』には、鹿児島県の青年からの投書も掲載されている。明治14年には「英雄豪傑多クハ貧賤ヨリ出ル論」と題した投書があり、ナポレオンやワシントン、西郷や大久保を挙げつつ、生活が苦しい者こそ工夫をして苦難を乗り越えようと努力し、偉大な人物になる可能性があるとして述べている。

第二百十三号(明治14年6月25日)

鹿児島県 荒川盾夫 年齢不詳

(前略)富貴ニ成長スル人ハ(中略)常ニ衣食住ノ美ナルニ飽キ人生欠ク可カラサル勉強剛毅ノカヲ生シ出スコト能ハス。(中略)至貧至賤ノ家ニ生ル、者ハ(中略)假令(たとえ)百折千挫スルトモ倦怠屈撓スルコトナク日夜孜々奮励ヲ以テ智識ヲ琢磨シ才能ヲ生育ス。(中略)古今英雄豪傑皆然リ。見ル可シ。遠クハ仏国ノ「拿破翁」(ナポレオン)米国ノ「華盛頓」(ワシントン)本朝豊臣秀吉近クハ西郷大久保等皆是レ一世ノ英雄ナリ。而シテ其来歴艱難ノ事ハ毎ニ人ヲシテ労苦忍耐ノカヲ惹起シ非常ノ才能ヲ発生セシムルノ源因ナラズヤ。(以下略) 『穎才新誌』

【大意】

第213号(明治14年, 1881年6月25日)

鹿児島県 荒川盾夫 年齢不詳

(前略)恵まれた環境に成長した人は、(中略)常に衣食住が恵まれた環境に飽き、人生に欠くことができない一生懸命努力する堅固な意思の力を生み出すことができない。(中略)非常に貧しく低い身分の家に生まれた者は、(中略)たとえ何度も失敗し挫折しようとも、物事に飽きて嫌になり屈服することなく、日夜コツコツ努力することで知識を磨き才能を伸ばす。(中略)古今の英雄は皆そうである。見よ。古くはフランスのナポレオン、アメリカのワシントン、日本の豊臣秀吉、最近では西郷や大久保らは皆一代の英雄である。そして、その経歴における苦労は、あらゆる人に苦労を耐え忍ぶことの大事さを思い起こさせ、それが非凡な才能を発揮させる原因ではないか。

- 維新後は東京へ移転する者も多く、父母とともに子どもたちも転居した。鹿児島県出身者の若者は学習会を作り、行いの良くない者には指導を加えることがあった。

第二百廿六号(明治14年9月24日) 学事雑報欄

在京鹿児島県の書生達ハ今度責善会と云ふを創立し互に智識を交換し親睦を厚ふし会員の中に不品行の者あれば之を幹事より譴責する法にして毎

月第一日曜日を以て会し専ら薩摩武士忠直の遺風を維持する見込なりと。  
先づ其の手始めに黒田公に忠告されしハ中々悲憤慷慨の文字であります。

『穎才新誌』

【大意】

第226号(明治14年, 1881年9月24日) 学事雜報欄

在京の鹿児島県出身の学生たちは、今回責善会という組織を作り、互いに知識を交換し、親睦を図り、会員の中で素行の良くない者がいれば幹事が叱る決まりにして、毎月第一日曜日に集まり、主に薩摩武士の忠義を重んじる伝統を守る予定であるという。まず最初に黒田清隆公から、ずいぶん嘆きや憤りの言葉を交えた指導があった。

- 西南戦争で疲弊した鹿児島の復興が進みつつあった中、川辺郷(現在の南九州市川辺町)の青年らは地域の学習会を立ち上げ、さらにほかの郷との連合学習会に発展させている。このように、青年らが新しい知識を社会に普及させる活動も活発化していった。

第二百四十七号(明治15年2月25日)

鹿児島県川辺郷親睦会ノ演説

鹿児島県薩摩国川辺郡川辺郷 肥後彦熊 演舌 十九年九月  
(前略)斯ル親睦会ガ此レヨリ後モ引続キテ、今ハ僅ニ薩南十余郷ノ親睦会ナレトモ、後ニハ鹿児島県ノ親睦会トモ成リ、九州親睦会トモ成リ、広大ナル集会ガ度々アル様ニナレバ、其間ニハ種々ノ或ハ政事ニ巧ナル人、或ハ学問ニ博キ人、或ハ農業ヤ商業ニ巧ナル人モ出デ来リ、賢明ナル人モ出来リ、剛毅ナル人モ出来リ、共ニ意見ヲ吐露シ互ニ親密ナル交際ヲ結ブニ至レバ、其幸福ヲ得ルコトハ実ニ我輩ガ預想ノ外ニ出デ、後来ノ為メニ衆多ノ利益ヲ得ルコト必セリ。(以下略)

『穎才新誌』

【大意】

第247号(明治15年, 1882年2月25日)

鹿児島県川辺郷親睦会の演説

鹿児島県薩摩国川辺郡川辺郷 肥後彦熊の演説 19歳9か月  
(前略)このような親睦会が今後も引き続き、今は南薩十余郷の親睦会であるが、いずれは鹿児島県の親睦会となり、九州の親睦会となり、大規模な集会が度々開かれるようになれば、その中には政治に詳しい人、あるいは学識が広い人、あるいは農業や商業に詳しい人、賢明な人、意志が強い人も出てきて、一緒に意見を述べて親密な交際を結ぶことになれば、そのような幸せは実に私の想像を超え、将来のために多くの人の利益になることは必定である。

## 【明治20年頃】

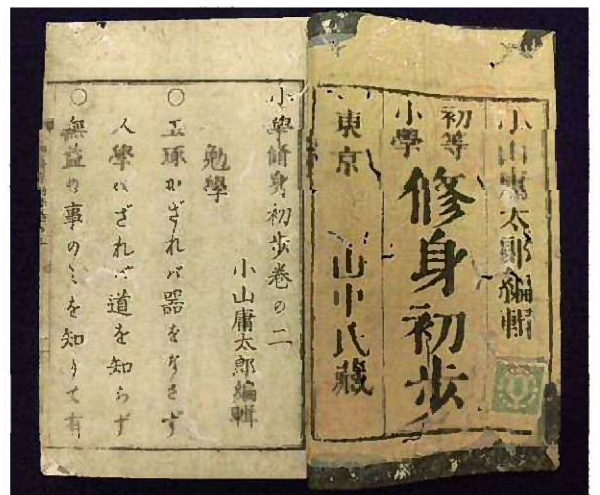
◎ 明治22年(1889年)に宮之城村(現在のさつま町宮之城)<sup>えいしん</sup> 盈進尋常高等小学校に教員として赴任した新潟出身の本富安四郎<sup>ほんぶやすしろう</sup>は、『薩摩見聞記』の中で当時の鹿児島県の教育や学校について以下のように記している。

- ・ 鹿児島県の就学児童の割合は、全国最低である。男子は就学対象児童の半分以上を越えた程度で、女子は就学対象児童の8～9%に過ぎない。石川県は、男子が80数%、女子が60数%就学している。
- ・ 鹿児島市内の小学校の男女比は2対1だが、地方では最高でも男女比が3対1で、学校によっては女子はいない場合もある。



「小学高等科第一級卒業証書」【黎明館蔵】

- ・ 他県では維新から既に20数年経っているが、鹿児島県は事実上、10数年しか経っていないため就学率が低い。鹿児島の維新は西南戦争後からと言って良く、それまでは封建制度が続いていた。西南戦争によって、鹿児島の人々は世の進歩に遅れたことに気付いた。
- ・ 西南戦争後に鹿児島では各種学校の設置が盛んになり、明治20年(1887年)頃には小学校の積立金(有力者からの献金等を基にしたものと考えられる)は全国3位、学校の面積は全国2位になった。



「初等小学修身初歩」【黎明館蔵】

◎ 武家社会の道德規範であった「武士道」の精神は、明治維新後、礼節・質素・儉約・忠義といった道德観として庶民にも受け継がれていった。当時の教師の多くが武士出身であり、学校教育を通じて浸透していったことも要因として挙げられる。<sup>1</sup>

1 『武士道』新渡戸稲造, 桜井鶴村訳

● 鹿児島県の中等教育機関としては、明治11年(1878年)設立の県立鹿児島中学と明治14年設立の公立鹿児島学校があったが、明治17年に両校が合併され、鹿児島県立中学造士館が設立された。館長には島津<sup>うずひこ</sup>珍彦(久光の四男)が就き、高等中学科と初等中学科の2科編制であった。なお、開校に伴い、磯地区の「異人館」が鹿児島城址に移築され、本館として使用された。<sup>1</sup>



中学造士館本館【黎明館蔵】

1 「鹿児島県の中等教育の変遷」(『鹿児島史学 26号』)山田尚二